介助犬・聴導犬使用者が望む動物病院の在り方

田岡 菜々子¹⁾、竹間 綾子¹⁾、山崎 泉¹⁾、水越 美奈¹⁾

1) 日本獣医生命科学大学獣医学部獣医保健看護学科

The Ideal Accommodations for Veterinary Hospital to Satisfy the Mobility Service Dog and Hearing Dog Users' Needs

Nanako Taoka¹⁾, Ayako Tikuma¹⁾, Izumi Yamazaki¹⁾, Mina Mizukoshi¹⁾

1) School of Veterinary Nursing & Technology, Nippon Veterinary & Life Science University

抄 録

日本における補助犬の実働数は年々増加しているが、未だ受け入れに躊躇する施設は少なくない。2009年に、動物病院側の受け入れの躊躇や不安、身構えを除き、盲導犬使用者がより利用し易いようにするために、盲導犬使用者の動物病院に対する要望に関する調査が行われたが、介助犬・聴導犬使用者に対する調査は未だ行われていない。そこで、介助犬使用者14組、聴導犬使用者8組に対して、利用しやすい動物病院の在り方に関する調査を行った。調査の結果、介助犬使用者が利用しやすい動物病院とは、設備面での問題を補える補助が行える病院で、聴導犬使用者が利用しやすい動物病院とはコミュニケーションにおいて、ニーズに合わせて親身な対応を行うことができる病院であるとわかった。それらの病院は全ての飼い主が利用しやすい動物病院の在り方にも繋がるのではないかと考えられた。

キーワード：介助犬使用者、聴導犬使用者、介助犬の健康管理、聴導犬の健康管理、動物病院

Abstract

In Japan, the number of service dogs is increasing yearly, but many cases of denial of access are still reported. In 2009, a research about the needs of guide dog users in veterinary hospitals was reported, but a similar research the report for mobility service and hearing dog users have not yet conducted. We conducted this survey in the form of a non-structural interview or questionnaire for fourteen mobility service and eight hearing dog users about the experiences and expectations of medical consultation in veterinary hospitals. As a result, we found that mobility service dog users required facility reliability, and that hearing dog users required assistance for communication. However these matters were found to be resolved by the support of veterinary hospital staff. It is thought that those veterinary hospitals capable of providing such support may be considered access-friendly for all owners of animals.

Keywords : Mobility service dog, Hearing dog, Health-care of mobility service dog, Health-care of hearing dog, Veterinary hospital

I. 序論

2012年3月現在、日本における補助犬の実働数は盲導犬1067頭、介助犬59頭、聴導犬34頭と年々増加しているが、米国・英国等の補助犬先進国に比べると未だ実働数は少数である。2002年5月に良質な身体障害者補助犬（以下、「補助犬」とする）の育成及び補助犬を使用する身体障害者の自立と社会参加を目的として、身体障害者補助犬法（以下、「補助犬法」とする）が成立し、同年10月から施行された。この補助犬法の制定により、不特定多数が利用する公共施設や公共交通機関での補助犬使用者の受け入れが義務付けられたが、未だに受け入れの拒否や不適切な対応を受けたという声は少なくない^(1,2)。また、補助犬の認知度を調査した報告では、補助犬や補助犬法という言葉は知っていても目的や趣旨までは理解していない等、完全な周知はされていないことが示唆されている^(3,4)。このことから、補助犬の公共施設への受け入れに関する国民からの認知度や理解度が低いことが考えられる。さらに、補助犬の健康管理や衛生管理等、補助犬使用者にとって切り離すことのできない動物病院においても、補助犬使用者との関わりが少ないために、受け入れることに躊躇し、不安を感じている動物病院は少なくないと報告されている⁽⁵⁾。

こうした現状から2009年には、動物病院側の受け入れの躊躇や不安、身構えを除くという目的で、盲導犬使用者の動物病院に対する要望に関する調査が行われた⁽⁶⁾。調査結果は盲導犬使用者が望む事は一般の飼い主も望むことであり、盲導犬使用者の声を聞き、動物病院の対応

に関する要望や思いを知ることは、動物病院側の盲導犬に対するさらなる理解を広げるだけでなく、補助犬使用者にとってもより利用しやすい動物病院が増えるのではないかと考察されている⁽⁶⁾。

しかし、介助犬、聴導犬使用者に対する調査は未だ行われていない。介助犬・聴導犬使用者は盲導犬使用者とは障害の内容も異なることから、動物病院に求める対応もそれぞれ異なってくると考えられる。さらに、補助犬の中でも介助犬、聴導犬の実働数は盲導犬に比較して非常に少ないために認知度はより低いと考えられる。実働数が少ないということは実際に接する機会も少なく、そのために動物病院での受け入れも盲導犬と比較して不安や疑問をより強く感じるのではないだろうか。これらのことから、今回は介助犬と聴導犬に焦点をあて、使用者が利用しやすい動物病院の在り方を調べることを目的に調査を行ったので報告する。

II. 研究方法

資料収集は2011年7月22、23日に開催されたヨコハマ・ヒューマン&テクノランド2011に会場した介助犬使用者5組、聴導犬使用者3組に対しての非構造式の口頭調査と、介助犬・聴導犬の訓練事業者や補助犬の情報調査団体である日本介助犬アカデミーを介し、介助犬使用者9組、聴導犬使用者5組に対して、アンケート用紙を使用した記入式の調査により行った（表1、表2）。介助犬使用者の年代は20～70代で、40代が最も多く、今まで使用した介助犬の頭数は1～2頭であった（表1）。聴導犬使用者の年代は40～60代で、40代が最も多く、今まで使

表1 口頭調査または質問紙による記入式の調査を行った介助犬使用者の内訳

	性別	年代	介助犬使用歴	所属協会
使用者1	女性	40代	1頭目	日本介助犬協会
使用者2	女性	40代	1頭目	日本介助犬協会
使用者3	男性	30代	1頭目	日本介助犬協会
使用者4	女性	40代	2頭目	日本介助犬協会
使用者5	女性	70代	2頭目	日本介助犬協会
使用者6				トータルケアアシスタントドッグ
使用者7	男性	40代	1頭目	京都ケアドッグステーション
使用者8	男性	60代	1頭目	日本介助犬協会
使用者9	男性	50代	1頭目	日本介助犬協会
使用者10	女性	50代	1頭目	日本介助犬協会
使用者11	女性	20代	1頭目	日本介助犬協会
使用者12	男性	50代	1頭目	兵庫介助犬協会
使用者13	男性	40代	1頭目	兵庫介助犬協会
使用者14	男性	60代	1頭目	兵庫介助犬協会

表2 口頭調査または質問紙による記入式の調査を行った聴導犬使用者の内

	性別	年代	聴導犬使用歴	所属協会
使用者1	女性	60代	1頭目	聴導犬普及協会
使用者2	女性	40代	2頭目	聴導犬普及協会
使用者3	女性	40代	1頭目	聴導犬普及協会
使用者4	女性	40代	1頭目	聴導犬普及協会
使用者5	女性	60代	1頭目	聴導犬普及協会
使用者6	女性	60代	1頭目	聴導犬育成の会
使用者7	女性	50代	1頭目	聴導犬育成の会
使用者8	女性	40代	1頭目	聴導犬育成の会

用した聴導犬の頭数は1～2頭であった(表2)。全ての調査は、本研究の主旨を対象者側に説明し、理解して頂いた後、了承を得た上で回答の記録を行い、時間制限は設けなかった。

介助犬使用者に対する調査は6項目、聴導犬使用者に対する調査は5項目の質問から構成された。介助犬使用者への質問内容は、①動物病院の施設面において困ったことはあるか(こちらが示した例から複数選択可とし、その他の場合は具体例を記述)、②今まで利用した動物病院でスタッフによる過度な親切、不適切な対応で不快な思いをしたことがあるか、また、良かった点・嬉しかった点はあるか(ありの場合はそれぞれ具体例を記述)、③待合室や診察中で困ったことはあるか(こちらが示した例から複数選択可とし、その他の場合は具体例を記述)、④薬を処方された際に、動物病院側から配慮・工夫はあったか、また処方に対する希望があるか(ありの場合はそれぞれ具体例を記述)、⑤介助犬の怪我により、包帯やガーゼの取り換えが必要になったことはあるか(ありの場合はうまく行う事ができたか)、そしてそれらの経験の有無に関わらず、そのような状況になった際は、どのように処置をするか(こちらが示した例から選択)、⑥獣医師や動物看護師に自宅まで往診をしてもらったことはあるか(ありの場合は介助犬の病状等を記述)、そして、往診の希望の有無とその理由、である(表3)。

聴導犬使用者への質問内容は、介助犬使用者への⑤介助犬の怪我により、包帯やガーゼの取り換えが必要になったことはあるかの質問を除外し同様のものとした(表3)。

Ⅲ. 研究結果

介助犬使用者14組、聴導犬使用者8組からの口頭調査と、質問紙を使用した記入式による調査の回収率は100%であった。以下の結果において、質問項目に対して回答を得られなかったものは無回答とした。

1. 介助犬使用者に関する調査結果

項目1の「動物病院の施設面において困ったことはあるか」という質問に対し、「駐車場」を選択したのは5組であり、『車いすを降ろすスペースがない』、『駐車場がない』という意見があげられた。「入口・ドア」を選択したのは9

組で、『引き戸が重い』、『段差がある』、『スロープが狭い』という意見があげられた。「受付」を選択したのは3組で、『カウンターが高い』という意見があげられた。「待合室・診察室」を選択したのは4組で、『スペースがない』、『車椅子用トイレがない』、『診察台の高さの調節ができない』という意見があげられた。「その他」を選択したのは0組であった(表4)。『動物病院を事前に下調べするので施設面において不便を感じることはない』、『入口や駐車場において不便を感じてもスタッフが補助を行ってくれるため、困ることはない』という意見もあげられた。

項目2の「今まで利用した動物病院で、スタッフによる

表3 介助犬使用者・聴導犬使用者に対する質問内容
(聴導犬使用者は⑤の質問はなし)

介助犬使用者に対する質問	
① 動物病院の施設面において困った事がありますか？(複数選択可) ある場合は、具体的な状況の記入もお願いいたします。	
<div> <div> <介助犬使用者> 駐車場 ある() なし() 入口 ある() なし() ドア ある() なし() 受付 ある() なし() 待合室 ある() なし() 診察室 ある() なし() その他 () </div> <div> <聴導犬使用者> FAX の対応がない() メールの対応がない() その他(具体的に記入してください) なし() </div> </div>	
② 獣医師やスタッフの対応について ・過剰な親切で不快な思いをされたことはありますか？ ある() なし() (ある場合は具体的にお答え下さい) ・不適切な対応で不快な思いをされたことはありますか？ ある() なし() (ある場合は具体的にお答え下さい) ・うれしかった点・良かった点がありますか？ ある() なし() (ある場合は具体的にお答え下さい)	
③ 待合室や診察中で困ったことについて(複数選択可) 待合室で他の犬に吠えられた経験 () 診察の検査結果や薬の説明が分かりにくかった () その他 (ある場合は具体的にお答え下さい)	
④ 薬を処方された際に、説明や渡し方で工夫・配慮はありましたか？ ある() なし() (ある場合は具体的にお答え下さい) ・また処方に対する希望をご記入ください。 (具体的にお答え下さい)	
⑤ 介助犬が怪我をしてしまい、包帯やガーゼの取り換えが必要になった経験はありますか？ 経験はある() 経験なし() ・経験がりの場合、うまく行う事ができましたか？ はい() いいえ() ・もし巻かなくてはいけない状況になった場合はどう対処しますか？ ご自身で巻く() 誰かに補助してもらう() その他()	
⑥ 今まで獣医師や看護師などに往診してもらった事がありますか？ ある() なし() ・ある場合、介助犬がどのような状態の時でしたか？ (具体的にお答え下さい) ・今後往診は希望されますか？ はい() いいえ() (理由を具体的にお答え下さい)	

表4 介助犬・聴導犬使用者が動物病院で不便と感じた施設

介助犬使用者が動物病院で不便と感じた施設	聴導犬使用者が動物病院で不便と感じた施設
駐車場(5組)	FAXの対応がない(2組)
入口・ドア(9組)	メールの対応がない(2組)
受付(3組)	その他(0組)
待合室・診察室(4組)	なし(6組)
その他(0組)	

表5 介助犬・聴導犬使用者が体験したスタッフの不適切な対応、動物病院で困った思いをした具体例

介助犬使用者が体験した不適切な対応、または困ったこと	聴導犬使用者が体験した、不適切な対応、または困ったこと
会計や処方をカウンター越しではなく、手渡しが良い	診察室からの口頭による呼び出し
待合室で他の犬に吠えられた	マスクで口元が見えない
他の飼い主が待合室でリードを長くもっている、またはリードがない為に、介助犬と他の犬が接触して困る	処置のみで説明がない
	筆談を希望したのに口頭で説明された
	待合室で他の犬に吠えられた

表6 介助犬・聴導犬使用者が体験した嬉しかった対応の具体例

介助犬使用者が体験した、嬉しかった対応	聴導犬使用者が体験した嬉しかった対応
混雑時は待合室まで問診を取りに来る	マスクを外して対応してくれる
診察室で会計や処方をすませる	診察内容や専門用語をメモ書き
	細かい説明や質問に対応してくれる
	筆談に応じてくれる

過度な親切、不適切な対応で不快な思いをしたことがあるか」という質問に対し、過度な親切に対して「ある」を選択したのは0組だったが、不適切な対応に対して「ある」を選択したのは3組で、『会計や処方を手渡しではなくカウンター越しでされた』という意見があげられた(表5)。

「スタッフの対応で良かった点・嬉しかった点はあるか」という質問に対しては、「ある」を選択したのは8組で、『混雑時は移動が困難なため待合室まで問診を取り来てくれた』、『会計や処方を診察室で済ませた』等という意見があげられた(表6)。

項目3の「待合室や診察中で困ったことはあるか」という質問に対し、「待合室で他の犬に吠えられた」を選択したのは5組で、そのうち1組は『スタッフが対応してくれたため大丈夫だった』と回答した。「その他」を選択した2組からは『小型犬の飼い主がリードを長く持っていた』、あるいは『リードを手放していたため介助犬に近づいてきた』という意見があげられた(表5)。

項目4の「薬を処方された際に、動物病院側から配慮・工夫はあったか」という質問に対し、3組が「ある」を選

択し、『動物病院が複数の薬の容器を用意し、使用しやすい容器を選択してくれた』、『希望に合わせた投与方法を動物病院が提案してくれた』という意見があげられた。また、「処方に対する希望はあるか」という質問に対し、『一日分もしくは一回分ずつ、ADL(日常生活動作)に合わせた分包にしてほしい』、『薬の袋・容器を選択したい』という意見があげられた(表7)。

項目5の「介助犬の怪我により、包帯やガーゼの取り換えが必要になったことはあるか」という質問に対し、4組が「ある」を選択し、『自分でできた』、『毎日病院でやってもらった』、『補助してもらった』と意見が分かれた。また、「そのような状況になった際は、どのように処置をするか」という質問に対しては、「自分で行う」を選択した組は3組、「補助を頼む」を選択したのは6組で、残り3組は「その他」を選択し、『時と場合による』と回答した。残りの2組は無回答であった。

項目6の「獣医師や動物看護師による往診の経験はあるか」という質問に対し、「ある」を選択したのは1組であり、『重病で動くことができない大型犬を移送するのは大変である』という意見があげられた。また、「今後

表7 介助犬・聴導犬使用者の薬の処方に対する希望や病院側からの配慮

介助犬使用者の薬の処方に対する希望や 病院側からの配慮	聴導犬使用者の薬の処方に対する希望や 病院側からの配慮
使用しやすい容器を選択させてくれる 希望に合わせた投与方法を提案してくれる 一日分もしくは一回分ずつ、ADL(日常生活動作)に合わせた分包をしてほしい	投与間隔や投与方法の詳しい説明とメモ書き 治療内容のメモ書き 専門用語のメモ書き

表8 往診の希望の理由

介助犬使用者	聴導犬使用者
<p><希望する理由></p> <p>自分の体調が悪い場合は介助犬を移送できない</p> <p>電動車いすを使用している為、介助犬を運ぶことは不可能</p> <p>介助犬が重篤な場合、移動することは困難な上、介助犬に負担がかかる</p> <p><希望しない理由></p> <p>詳しい検査が行えないので、病院で検査を行った方が安心できる</p>	<p><希望する理由></p> <p>聴導犬が高齢になった時や歩けなくなった時に希望したい</p> <p><希望しない理由></p> <p>施設で見てもらった方が、設備が整っている為、正確な診察が行えて安心できる</p>

図1 往診の希望の有無

往診を希望するか」という質問に対して、「はい」を選択したのは6組であり、『自分の体調が悪い場合は介助犬を移送できない』、『電動車椅子を使用しているため介助犬を運ぶことは不可能』、『介助犬が重篤な場合に移動させることは困難で介助犬に負担がかかる』等という意見があげられた。一方、「いいえ」を選択したのは3組で、『詳しい検査が行えないので動物病院で診察を行った方が安心できる』という意見があげられた(図1, 表8)。

2. 聴導犬使用者に関する調査結果

項目1の「動物病院の施設面において困ったことはあるか」という質問に対し、「FAXの対応がない」と「メールの対応がない」の両方を選択したのは2組で、『初診の場合にFAXやメールで対応しない所が多いために代理の者に電話連絡を依頼する手間がかかりすぐに受診できなかった』、『予約や問い合わせが電話対応のみであった』という意見があげられた。しかし、「なし」を選択した6

組からは、『最近ではメールやFAXでも早い段階で対応してくれているため、以前よりもよくなった』という意見もあげられた(表4)。

項目2の「今まで利用した動物病院で、スタッフによる過度な親切、不適切な対応で不快な思いをしたことがあるか」という質問に対し、過度な親切に対して「ある」を選択したのは0組であったが、不適切な対応に対して「ある」を選択したのは3組で、『診察室からの口頭による呼び出し』、『マスクを着用していて口元を見ることができないため口話を読むことができない』、『処置のみで説明がなかった』、『筆談を希望したのに口頭で説明をされた』、という意見があげられた(表5)。

「スタッフの対応で良かった点・嬉しかった点はあるか」という質問に対しては、「ある」を選択したのは6組で、『細かい説明や質問に対応してくれる』、『専門用語や診察内容などのメモ書きをしてくれる』、『口元が見えるようにマスクを外してくれる』、『筆談に応じてくれる』等という意見があげられた(表6)。

項目3の「待合室や診察中で困ったことはあるか」という質問に対し、「待合室で他の犬に吠えられた」を選択したのは3組であった(表5)。

項目4の「薬を処方された際に、動物病院側から配慮・工夫はあったか」という質問に対し、5組が「ある」を選択し、『投与間隔や投与方法を詳しく説明してメモ書きにしてくれた』という意見があげられた。また、「処方に対する希望はあるか」という質問に対し、「治療内容を確認のためにメモ書きしてほしい」、「専門用語は口話で読み取ることが難しいのでメモ書きにしてほしい」という意見があげられた(表7)。

項目5の「獣医師や動物看護師による往診の経験はあるか」という質問に対し、「ある」を選択したのは0組であった。「今後往診を希望するか」という質問に対して、「はい」を選択したのは2組であり、『聴導犬が高齢になった時や歩けなくなった時に希望したい』という意見があげられた。一方、「いいえ」を選択したのは4組であり、『施設で見てもらった方が、設備が整っている為、正確な診察が行えて安心できる』という意見があげられた(図1, 表8)。

IV. 考察

本調査の調査結果より、介助犬使用者は主に病院の施設面や、指先を必要とする細かい作業を行う際において、聴導犬使用者は主に動物病院スタッフとのコミュニケーションにおいて不自由を感じていることが明らかとなった

が、これらの問題の多くはスタッフの対応で補うことが出来るのではないかと考えられた。そこで、本調査結果から得た介助犬・聴導犬使用者の意見を参考にし、使用者にとって利用しやすい動物病院に必要な、病院スタッフが行うべき補助について考えた。

1. 介助犬使用者

(1) 施設面における補助

階段や駐車場等の施設面に対して不自由を感じている介助犬使用者は多かった。車椅子を使用する介助犬使用者にとって、移動する際の広いスペース、スロープ、車椅子用の駐車場等があることは重要であり、バリアフリーに基づいた施設面の改善が必要であると考えられる。しかし、工事費用など経済的な負担がかかる為、全ての動物病院で行う事は現実的には困難である。そこで、介助犬使用者の回答の中で、入り口や駐車場において不自由を感じてもスタッフが補助を行ってくれるため困ることはない、という意見があげられたことから、スタッフが補助を行うことで施設面の不自由を補えることもあると考えた。

例えば、入口やドアはスタッフが開けること、階段では段差の補助を行うこと、受付が高い場合は受付を挟まずに待合室に出て直接顔を合わせて対応すること、診察室が狭い場合は診察台や椅子などを移動させてスペースを確保すること等が考えられた。しかし、車いす用のトイレがない、スロープが狭いといった意見等、スタッフで補うことができない問題もある。これらの意見に関しては、車椅子用のトイレがないこと、診察室が狭く車椅子の移動が困難になる可能性があることを介助犬使用者に事前に伝えておく必要があると考えられる。また、車椅子による移動が困難であることを配慮し、移動が最小限になるよう混雑時は待合室まで問診を取りに行く、診察室で会計や処方を済ませるといった工夫も役立つと考えられた。

(2) 待合室において注意すべき点

待合室で困った経験の中で、犬に吠えられた経験がある介助犬使用者は多く、また、来院している他の犬のリードが長い、もしくはリードが手から放されていたために、介助犬に近づいてきたという意見もあげられていたことから、スタッフは飼い主らに対し、リードを長くせずに、犬は自分のすぐ傍におくように指導する必要があると考えられた。これは、介助犬に限らず、全ての飼い主が待合室で不安なく待つために必要な配慮であるが、特に、介助犬使用者は他の犬が急に接近してきた時に、介助犬のリードを咄嗟に引くことや、別の場所に移動するといった行動を瞬時に行うことは困難である事が多い

と考えられるため、他の犬が来院した場合は声掛けや、待機場所の確保等の必要があると考えられる。

(3) 薬の処方における補助

介助犬使用者の中には障害の種類や箇所によって指先を使う細かい動作を行うことが難しい場合があるため、薬を処方する際には、薬の形状や容器を選択できるようにすることや、ADLに合わせて分包することが必要になると考えられた。また、包帯やガーゼの取り換えに関しても、介助犬使用者が自身で取り換えることが困難な場合は、動物病院で取り換える提案をするか、包帯・ガーゼを頻繁に取り換える必要がないように処置を行う必要があると考えられた。

(4) 往診の必要性

今回の調査結果から、介助犬使用者の多くは往診を希望していることがわかった。介助犬使用者は自ら介助犬を運ぶことが困難であることが多いことや、障害によっては脊髄損傷による内臓障害や関節リウマチなど、気温や気候等により症状が左右される場合がある。しかし、往診で詳しい検査を行うことは困難なため、詳細な検査が必要な場合は、後日来院してもらうか、往診ではなく飼い主を含めた送迎サービスが必要となる可能性がある。

2. 聴導犬使用者

(1) 施設面における補助

動物病院の多くは、診察の予約や問い合わせは電話の対応でしか行っておらず、聴導犬使用者は家族や代行者に電話を依頼するために時間がかかってしまう等の意見があげられた。また、代行者がすぐ近くにいない場合はFAXやメールに頼らざるを得ないことから、FAXやメールによる対応も可能にしておく必要があると考えられる。また、FAXやメールの場合、連絡がきたことに気付かない可能性も考えられるため、電話同様、受付ですぐに連絡がきたことに気付くよう工夫をする必要があろう。

(2) コミュニケーションにおける補助

調査結果より、聴導犬使用者は診察室からの口頭による呼び出しや、診察や薬処方時の口頭のみでの説明等、病院スタッフとコミュニケーションをとる際に不自由を感じていることが多いことから、使用者とのコミュニケーションに関する補助を行うことが重要であると考えた。例えば、聴導犬使用者を診察室へ迎える際は音声のみによるアナウンスではなく、直接呼びに行く必要があると考えられる。また、口話によりコミュニケーションがとれる場合もあるため、マスク等で口元を覆わずに、口の動きが分かるようにゆっくりと話す事が重要である

と考えられた。しかし、診察内容や薬の説明は専門用語や難しい言葉が使われる場合が多いために、口話のみで全ての内容を正確に読み取る事は困難であると考えられる。さらに、聴導犬使用者の中には、診察内容を聞き取れているか不安であったが、メモ書きをしてもらうことで情報を把握でき、家族にも正確に伝えられたので助かった、といった意見も挙げられた事から、診察内容や薬の説明等を写真付きで行うことや、筆談やメモ書きによって行う必要があると考える。

V. 結論

本調査より考えられた介助犬・聴導犬使用者に対する補助は、使用者に限らず、補助犬を使用していないが障害を持つ飼い主や、高齢の飼い主に対しても活用できると考えられる。このことから、介助犬・聴導犬使用者が利用しやすい動物病院とは、設備面での問題を補える補助やニーズに合わせて親身な対応を行うことができる病院であり、それは全ての飼い主が利用しやすい動物病院の在り方にも繋がるのではないかと考える。筆者は今回の調査で実際に補助犬使用者と接し、様々なニーズを知ることができた。実際に補助犬使用者と接することができる場に参加する事や、補助犬の現状等を書籍やセミナー等で知ることまた、補助犬やそれらの使用者に対する先入観をなくし、より好意的な受け入れに繋がると考える。

文献

- 1) 三浦靖史, 石川智昭, 岡田奈々・他 (2010) 兵庫県の医療機関における身体障害者補助犬受け入れの現状と課題, 日本補助犬科学研究, 4(1), 31-37
- 2) 山崎恵子, 高柳友子, 竹前栄治・他 (2007) 透析施設における盲導犬の受け入れ, 日本補助犬科学研究, 1(1), 11-23
- 3) 野口裕美, 角尾愛美, 難波結紀・他 (2011) 動物関連専門学校における補助犬認知度調査, 日本補助犬科学研究, 5(1), 62-66
- 4) 上原紀美子 (2011) 西鉄久留米駅周辺商業施設における調査からみた身体障害者補助犬の同伴受け入れ状況と今後の課題, 久留米大学文学部紀要, 社会福祉学科編第10号・第11号合併号
- 5) 水越美奈 (2007) 補助犬を診療するにあたって獣医師に知っておいてほしいこと, SAMedicine, 9(4), 63-66
- 6) 大井美奈, 水越美奈 (2009) 盲導犬使用者が望む動物病院の在り方, 日本補助犬科学研究, 5(1), 37-45